

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21320011

研究課題名（和文） <文明の衝突>から<文明の対話>へー諸宗教間の相互理解の為の哲学的理論構築の試み

研究課題名（英文） From “the Clash of Civilizations” to “the Dialogues between Civilizations”, a trial to establish a philosophical theory to deepen mutual understanding between various religions.

研究代表者

八巻 和彦（YAMAKI KAZUHIKO）

早稲田大学・商学大学院・教授

研究者番号：10108003

研究成果の概要（和文）：<文明の衝突>から<文明の対話>への道は、各社会が己の価値観を絶対視することなく、互いの相違を外的表現の相違であって本質的な相違ではないことを認識することによって確保される。たとえば宗教において教義と儀礼を冷静に区別した上で、儀礼は各社会の文化によって表現形式が異なることを認識して、儀礼の間に相違が存在するから教義も異なるに違いないとする誤った推論を避けることである。キリスト教ユニテリアニズムとイスラームの間の教義には本質において相違がないが、儀礼形式は大いに異なることでしばしば紛争が生じ、他方、カトリックとユニテリアニズムの間では教義は大いに異なるにもかかわらず、儀礼が類似しているとみなされることで、ほとんど紛争が生じない、という事実に着目すれば、われわれの主張が裏付けられるであろう。

研究成果の概要（英文）：In order to establish a way to go from <the clash of civilizations> to <the dialogues between civilizations> it is necessary that we avoid to consider the view of the world of our own society as unique absolute truth, while we recognize differences from other cultures not as essential differences but as the outward ones. For example about a religions we must avoid such a wrong judgment that here is a doctrinal difference between religions, so long as there is differences ritual differences between them, while we objectively differentiate their doctrines and their rites. Our argument could be well supported, so long as we notice following two facts; (1) that between Christian Unitarianism and Islam there is little doctrinal difference with regard to absolute monotheism, while there is so many ritual differences between them that conflicts sometimes occur between them, and (2) that between Unitarianism and Catholicism there is a great difference with regard to the Trinity, while it looks so like that there is little ritual differences between them that few conflicts occur between them.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	3,000,000	900,000	3,900,000
2010年度	4,100,000	1,230,000	5,330,000
2011年度	4,400,000	1,320,000	5,720,000
年度			
年度			
総計	11,500,000	3,450,000	14,950,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：哲学原論・各論

1. 研究開始当初の背景

- (1) 本研究課題は、平成 16 年度より三年間にわたり交付を受けた科学研究費補助金による研究課題「ヨーロッパ中世における宗教間理解の哲学的基礎」の到達点を現代的に展開したものと設定された。
- (2) 上記の課題はその内容から当然に必要なことであるが、研究代表者八巻和彦をはじめとする研究メンバーが、これまでの各自の研究活動において知己として得た海外の研究者たちと密接な連携をとりつつ、国際的な視点からこの研究課題を遂行することとした。

2. 研究の目的

以下の7点を解明することを目的とした。

- (1) <文明の衝突>といわれる現象の客観的姿とその原因とされるもの
- (2) <世俗化>概念の意味と意義、ならびにその問題性
- (3) キリスト教、イスラーム、ユダヤ教、仏教のそれぞれにおける<信仰>と<理性>の意味と両者の関係
- (4) <文明の対話>を可能とさせるための基礎条件の解明
- (5) この基礎条件を成立させるための、<信仰>と<理性>との関係の最適なあり方の解明
- (6) イスラームにおける<世俗化>概念成立の可能性の探求
- (7) 広く現代世界が直面している問題を克服するためにわれわれの視座が貢献する可能性の探求。

3. 研究の方法

- (1) 研究遂行のために以下の二つの方法をあわせて使用した。①研究メンバー（代表者ならびに分担者）が、個々に各自の専門的視点から研究課題についての研究を進める。②メンバーが一堂に会して、個々の研究の成果を発表する共に、互いに議論をして、研究成果を共有すると同時にさらに改善を図る。
- (2) 上記の①の研究は、各メンバーにおいて以下の点を中心に遂行された。

八巻 和彦（研究代表者）：研究計画の統括と研究計画の円滑な進捗を図ると共に、<世俗化>の問題と諸文明における<理性>概念についての研究。

矢内 義顕（研究分担者）：中世初期のキリスト教世界のイスラーム観について研究ならびに自らキリスト者として立場から<衝突>と<対話>についての研究。

川添 信介（研究分担者）：トマス・アクィナスの『対異教徒大全』について本研究計画に沿った研究ならびにトマスの自然法についての研究。

山我 哲雄（研究分担者）：ヨーロッパ中世においてマイノリティではありながらも重要な役割を果たしていたユダヤ教の思想家モーゼス・マイモニデスを中心とするユダヤ教について研究。

松本 耿郎（研究分担者）：西欧中世に対する諸イスラーム思想家の影響ならびに中国に根付いたイスラーム思想についての研究。

司馬 春英（研究分担者）：長年にわたり比較思想学会の理事として活動してきた経験にたち、かつ仏教者の立場から、文明の<衝突>と<対話>についての研究

小杉 泰（研究分担者）：イスラーム世界において他の文明がいかなるものとしてとらえられているか、ならびに現代イスラーム社会における<世俗化>問題について研究。

佐藤 直子（研究分担者）：15世紀のキリスト教世界で、イスラーム・トルコによるコンスタンチノーブル征服の際に例外的に「宗教寛容論」を説いたクザーヌスを研究。

降旗 芳彦（研究分担者）：中世において学問概念・理性概念の深化に貢献したR. ベーコンの諸著作における<信仰と理性の関係>ならびに異教への視線について研究

橋川 裕之（研究分担者）：中世後期の東方キリスト教会とローマカトリック教会の関係、ならびにこの両者とイスラームとの関係についての研究。

岩田 靖男（連携研究者）：古代のアリストテレスから近代のカント、現代のレヴィナス等までを駆使して独自の寛容論と平和論の研究。

芝元 航平（連携研究者）：トマス・アクィナスにおける<信仰>概念の分析によって寛容思想の可能性を研究。

比留間 亮平（平成 10 年度まで連携研究者）：エラスムスおよびピコを中心に、ルネサンス期のキリスト教世界による他宗教理解について研究。

- (3) 上記の②の方法は以下のような3種の形態で実施した。

- 1) 本研究グループのメンバーだけで集まって発表・討論をする研究会、研究合宿。

2) 既存の学会の大会に本研究グループのメンバーが複数参加して、パネルを設定し、メンバーが研究成果を発表すると共に、外部からの批判を受けて、さらなる研究の改善を図る。

3) 本研究グループのメンバーが中心となって研究会を開催するが、それに一般からの参加も求めて、議論に参加してもらう。

(4) 上記の3種の形態のうちの1)の主なものは以下の日時で実施した。

2009年5月16日、早稲田大学にて。

2010年3月7-9日、熱海にて。

(5) 上記の3種の形態のうちの2)は以下の日時で、三回、実施した。

2009年9月12日、日本宗教学会第68回学術大会(於、京都大学)におけるパネル発表ならびにその前後の打ち合わせ研究会と締めくくり研究会。

2010年9月4日、日本宗教学会第69回学術大会(於、東洋大学)におけるパネル発表ならびにその前後の打ち合わせ研究会と締めくくり研究会。

2011年9月4日、日本宗教学会第70回学術大会(於、関西学院大学)におけるパネル発表ならびにその前後の打ち合わせ研究会と締めくくり研究会。

(6) 上記の3種の形態のうちの3)は以下の日時で、2回、実施した。

2011年3月6-8日、International Colloquium: "Thoughts to conquer <the clash of civilizations>"、早稲田大学および下田市にて(このコロキウムには3名の外国人研究者を招聘して、講演をしてもらうと共に彼らを交えて討論を行った)。

2012年3月21-22日、早稲田大学にて。

4. 研究成果

本研究課題についての三年間にわたる共同研究の成果について、以下に略述する。

(1) <文明の衝突>といわれる諸紛争をその具体相において研究することによって、これら諸紛争の原因は、決して文明・文化の相違、宗教間の対立ではなく、むしろ経済的利害の対立であることが明らかになった。しかし、対立・紛争を激化させる要因としては、文明・文化・宗教の相違が重大な役割を果たしている事実があり、とりわけ戦争遂行の際には両陣営の政治指導者が、これらの相違を利用して自陣営内部の団結を強化するとともに、外部との対立を扇動しようとするとも明らかになった。

宗教間の相違が心理的敵愾心を惹起するメカニズムは、教義の異なりにあるというよりも、行動様式のことなり、儀礼の相違により惹起される相互の違和感にある。従って互いの相違を外表現の相違

であって本質的な相違ではないことを認識すれば、対話の道は確保される。実際に、キリスト教ユニテリアニズムとイスラームの間の教義には本質において相違がないが、儀礼形式は大いに異なることでしばしば紛争が生じ、他方、カトリックとユニテリアニズムの間では教義は大いに異なるが、儀礼が類似していることとみなされることで、ほとんど紛争が生じないという事実に着目すれば、われわれの主張が裏付けられるであろう。

(2) 政治と宗教を公共圏においてはできる限り分離しようとする<世俗化>概念は、カトリックとプロテスタントの間の紛争を収めるべく西欧近代において獲得されたものであるが、それもまだ安定したものとなっているわけではない。フランスのように公共圏への一切の<宗教性>の持込を許さない国から、隣のドイツのようにキリスト教を政党名に冠することを認めている国まで、必ずしも一義的ではない。他方、イスラーム世界でも、トルコのように<政教分離>を貫こうとしている国からイランのように<政教一体>へと回帰した国まであること、さらには、<世俗化>は巷間に言われるようなポジティブな面ばかりではなく、公共圏における価値観の共有に困難をきたしやすい側面もあることが明らかになった。この問題性については、2011年12月初旬にドイツのベルンカステル・コース市で開催された Kueser Akademie für euro-päische Geistesgeschichte による Kolloquium: Werte-Bildung in Europa に招聘された八巻和彦(研究代表者)が討論において指摘して、参加者の賛同を得たところである。

(3) キリスト教、イスラーム、ユダヤ教、仏教のそれぞれにおける<信仰>と<理性>の意味と両者の関係について研究した結果、そもそもそれぞれの文明・文化・宗教が成立している社会で卓越的に使用されている理性の在り方に多様性があること、しかし、その多様性を、「先進国」側は自らの社会における理性使用が唯一の正当なものであり、他の多様な在り方は自らの使用法・意味へと一義的に収斂されることが当然であると考えたという独善性があることが明らかになった。

(4) 確かに、人類の精神的能力としての「理性」は、数学などを典型とする抽象的精神活動の場面では強度の普遍妥当性を有するのであるが、しかし具体的日常的場面において使用されている理性は多様性を有し、その限りでは文化の多様性と理性の多様性は相互依存関係にあるとみなすべきであるから、<文明の対話>を可能とさせるための基礎条件としては、この<理性使

用の多様性>を相互に承認しつつ、どこにおいて互いに異なっているのかを理解しておくことが不可欠であることが明らかになった。

(5) 本研究計画において掲げた5番目の研究目的としての、「<信仰>と<理性>との関係の最適なあり方の解明」という点については、この研究目的の設定自体に西欧に卓越的な<世俗化>思想のバイアスがかかっていたことを認識させられることとなった。イスラーム世界においては現代でもなお法が宗教の場面で扱われていることを当該地域の人々が当然視していること、他方、西欧ならびに「先進国」では<信仰>と<理性>を分離することを当然視しながらも、上記(2)の末尾で指摘したような事態が生じているという現実を鑑みると、上記(3)と(4)のような視点から「<信仰>と<理性>との関係の最適なあり方」というものを一義的に定めることが容易でないこと、そのためにはさらなる研究が必要であることが判明した。ここにわれわれの次の研究課題が浮上し、「グローバリズム批判のための<非近代>的視座の再構築—理性と文化の関係」という研究課題をもって2012年度の科学研究費へ応募することとなった次第である。

(6) 宗教を理解するに際しては歴史性を援用することは慎重でなければならないが、宗教をできる限り学問的に扱おうとしているわれわれとしては、イスラームがキリスト教に遅れること600年経って成立したという歴史的事実を考慮することを忘れることはできなかった。すると、イスラーム世界にも多様性が現存し、さらにイスラーム社会におけるムスリムの生活態度一般にもたえざる変化が存在しているのだから、<世俗化>概念の成立可能性を皆無とすることはできないであろうことが見えてきた。とは申せ、西欧キリスト教においても<世俗化>がその社会内部でまがりなりにも「公認」されるまでには200年ほどの時間がかかっているのだから、そのような長いスパンでイスラーム世界におけるこの点を見てゆかねばならないことも明らかとなった。

(7) 以上のような本研究計画の到達点は、一つの価値基準・唯一の方法で社会を運用することをよしとして、その実現を他の国々に一方的に求める思想としてのグローバリズムを批判することへと向かわざるをえなくなった。そして、われわれの研究によれば、グローバリズムとは「計算的理性」・「道具的理性」を理性の典型とする近代的理性概念の終着点であることが明白となったので、この点についての理論的研究をさらに深化させるとともに、それを

批判するための視座を「理性の普遍妥当性」を安易に主張しない文化において使用されている<非近代>（「前近代」ではない）における理性に求めることとし、それらの理性をも、それぞれの自閉的空間から学問的研究のより広い場に持ち出して比較研究を行い、実践的使用を試みる必要を痛感させられることとなった。ここに、広く現代世界が直面している問題を克服するためにわれわれの視座が貢献できる可能性があるように思われる。

なお、上記のように昨2011年12月に研究代表者・八巻和彦が招聘されたKueser Akademie für europäische Geistesgeschichteによる2012年8月のKolloquiumに、再び招待されているので、この視点からの見解を述べるつもりである。

なお、以上に記述した成果次項に挙げられているような諸形態で公表されているが、それらに加えて、本研究計画に参画したメンバーにより論文集としてまとめて可及的速やかに公刊することも合意されている。

さらに、個々のメンバーによって、多様な場でいっそう豊かな研究成果が発表されるであろうことも、大いに予想されている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計15件)

- ① 小杉 泰、「現代宗教としてのイスラーム：世界的なウンマとモスクを中心とする地域コミュニティ」、宗教研究、371号、査読有、2012、pp. 71-96.
- ② 松本 耿郎、「馬徳新の「漢訳道行究境」とアジーズ・ナサフイーの”Maqsad-e Aqsa”に関する一考察、聖トマス大学論叢「サピエンチア」、46号、査読無し、2012、pp. 1-23.
- ③ 八巻 和彦、「<文明の衝突>を超える視点、文化論集、427号、査読無し、2011、pp. 91-124.
- ④ 八巻 和彦、「現代における宗教的多元論の要請、共生学—Sapientia Convivendi—、5号、査読有、2011、pp. 3-27.
- ⑤ 八巻 和彦、「Der Blick am Rande zum Rande im Denken des Nikolaus von Kues, Schneider; Schwaetzer; de Mey; Bocken (hrsg.): ”videre et videri coincidunt” — Theorien des Sehens in der ersten Haelfte des 15. Jahrhunderts (Aschendorff Verlag, Muenster)、査読

- 有、2011、pp.143-162.
- ⑥ 矢内 義顕、13世紀の一修道士がみた十字軍とイスラーム—ハイスターバッハのカエサリウス『奇跡についての対話』から—、文化論集、427号、査読無し、2011、pp.125-146.
 - ⑦ 橋川 裕之、アトス山の静寂——総主教アタナシオスとビザンティン・ヘシカズムの接点、藤巻和宏編『聖地と聖人の東西——起源はいかに語られるか』、査読無し、2011、pp.203-234.
 - ⑧ 八巻 和彦、哲学と信仰——ニコラウス・クザーヌスにとって哲学は何であったのか、日本の哲学10巻、査読有、2010、pp.57-75.
 - ⑨ 八巻 和彦、西欧における〈開かれた世界と開かれた書物〉、多元的世界観の共存とその条件(国際高等研究所報告書、研究代表者 石川文康)0902、査読有、2010、pp.123-146.
 - ⑩ 松本 耿郎、”Ayatollah Khomeini and the Concepts of Wilayah and Walayah,” *Journal of Shi’ s Islamic Studies* (The Islamic College, London) III, 1, 査読有、2010、pp.5-22.
 - ⑪ 八巻 和彦、クザーヌスにおける理性の普遍性と哲学の複数性—『信仰の平和』を中心にして、『「いのち」の流れ—峰島旭雄先生傘寿記念論文集』(北樹出版)、査読有、2009、pp.232-245.
 - ⑫ 矢内 義顕、カンタベリーのアンセルムスにおける寛容の思想、『「いのち」の流れ—峰島旭雄先生傘寿記念論文集』(北樹出版)、査読有、2009、pp.246-255.
 - ⑬ 松本 耿郎、”On Rumi’ s Philosophy fo Language”, in: *Sophia Perenn* (The Iranian Institute of Philosophy), I-1, 査読有、2009、pp.362-386.
 - ⑭ 川添 信介、”Verbum and Epistemic Justification in Thomas Aquinas”; *The Word in Medieval Logic, Theology and Psychology* (ed. by Tetsuro Shimizu and Charles Burnett)、査読有、2009、pp.273-289.
 - ⑮ 山我 哲雄、モーゼス・マイモニデスとユダヤ教の613の掟、『旧約学研究』(日本旧約学会)第6号、査読有、2009、pp.67-121.

[学会発表] (計6件)

- ① 八巻 和彦、矢内 義顕、橋川 裕之、川添 信介、芝元 航平(連携研究者)、パネル「宗教間対話の思想——理性は文化の多様性を超えうるか——」、日本宗教学会第70回学術大会、2011年9月4日、関西学院大学

- ② 矢内 義顕、ユダヤ教、キリスト教、イスラーム—ペトルス・アルフォンソイ『ユダヤ人との対話』を中心に—、京都ユダヤ思想学会、2011年6月11日、京都大学。
- ③ 八巻 和彦、Viewpoints to conquer <the clash of civilizations>, *International Colloquium “Thoughts to conquer <the clash of civilizations>”*, 2011年3月6日、早稲田大学。
- ④ 八巻 和彦、Die cusanische Gottes-Namen, *Internationales Wissenschaftliches Cusanus-Symposium “Der Gottes-Gedanke des Nikolaus von Kues”*, 2010年10月22日、Trier大学。
- ⑤ 矢内 義顕、橋川 裕之、佐藤 直子、降旗 芳彦、比留間 亮平(平成10年度まで連携研究者)、パネル「宗教間対話の思想—その歴史と理論—」、日本宗教学会第69回学術大会、2010年9月4日、東洋大学。
- ⑥ 八巻 和彦、矢内 義顕、松本 耿郎、橋川 裕之、司馬 春英、比留間 亮平(平成10年度まで連携研究者)、パネル「宗教間対話の思想—歴史的諸相とそれらの対話—」、日本宗教学会第68回学術大会、2009年9月12日、京都大学。

[図書] (計6件)

- ① 矢内 義顕、(翻訳) J. グニルカ著『聖書とコーラン』、教文館、2012、253+xvi.
- ② 小杉 泰、イスラーム 文明と国家の形成、京都大学学術出版会、2011、531.
- ③ 小杉 泰、『イスラームの歴史2——イスラームの拡大と変容』、山川出版社、2010、350.
- ④ 山我 哲雄、(翻訳) O. ケール著『旧約聖書の象徴世界』、教文館、2010、463.
- ⑤ 川添 信介(他)、こころの謎 kokoroの未来、京都大学学術出版会、2009、458.
- ⑥ 小杉 泰・長岡 慎介、イスラーム銀—金融と国際経済、山川出版社、2009、120+2.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

八巻 和彦 (YAMAKI KAZUHIKO)
早稲田大学・商学学術院・教授
研究者番号：10108003

(2) 研究分担者

矢内 義顕 (YAUCHI YOSHIAKI)
早稲田大学・商学学術院・教授
研究者番号：90200469
川添 信介 (KAWAZOE SHINSUKE)
京都大学・文学研究科・教授
研究者番号：90177692

山我 哲雄 (YAMAGA TETSUO)
北星学園大学・経済学部・教授
研究者番号：80230332
松本 耿郎 (MATSUMOTO AKIRO)
研究者番号：00159154
聖トマス大学・文学部・教授
司馬 春英 (SHIBA HARUHIDE)
大正大学・文学部・教授
研究者番号：90338591
小杉 泰 (KOSUGI YASUSHI)
京都大学・アジア・アフリカ地域研究科・
教授
研究者番号：50170254
佐藤 直子 (SATO NAOKO)
上智大学・文学部。教授
研究者番号：60296879
降旗 芳彦 (FURIHATA YOSHIHIKO)

実践女子大学・文学部。准教授
研究者番号：20238661
橋川 裕之 (HASHIKAWA HIROYUKI)
静岡県立大学・国際関係学部・専任講師
研究者番号：90468877
(3) 連携研究者
岩田 靖男 (IWATA YASUO)
東北大学名誉教授
研究者番号：30000574
芝元 航平 (SIBAMOTO KOUHEI)
上智大学中世思想研究所 所有期職員
比留間 亮平 (HIRUMA RYOUHEI)
立教大学非常勤講師 (平成10年度まで連
携研究者)

